

2014 年度 FD 活動評価点検報告書

1. 中部大学の FD 活動組織について

本学における教育活動・改善に向けた教員の資質向上策としての FD (Faculty Development) 活動は、学長を委員長とした全学 FD 委員会のもと、各学部 FD 委員会および各学科組織があり、全学体制の FD 活動ワーキングが中心となって種々の検討を行っている。また、教育活動顕彰審査選考委員会や FD 活動評価点検委員会が図 1 のように組織されており、FD 活動の内容について評価できる体制が整っている。なお、全学 FD 委員会および学部 FD 委員会は、2007 年度まで本学に設置されていた FD 推進委員会、学部での FD に関する諸活動を 2008 年度より新しく改変した組織である。また、大学教育研究センター（教員 3 人、事務員 4 人で構成）が主管部署として、FD 活動の推進、支援を行っている。

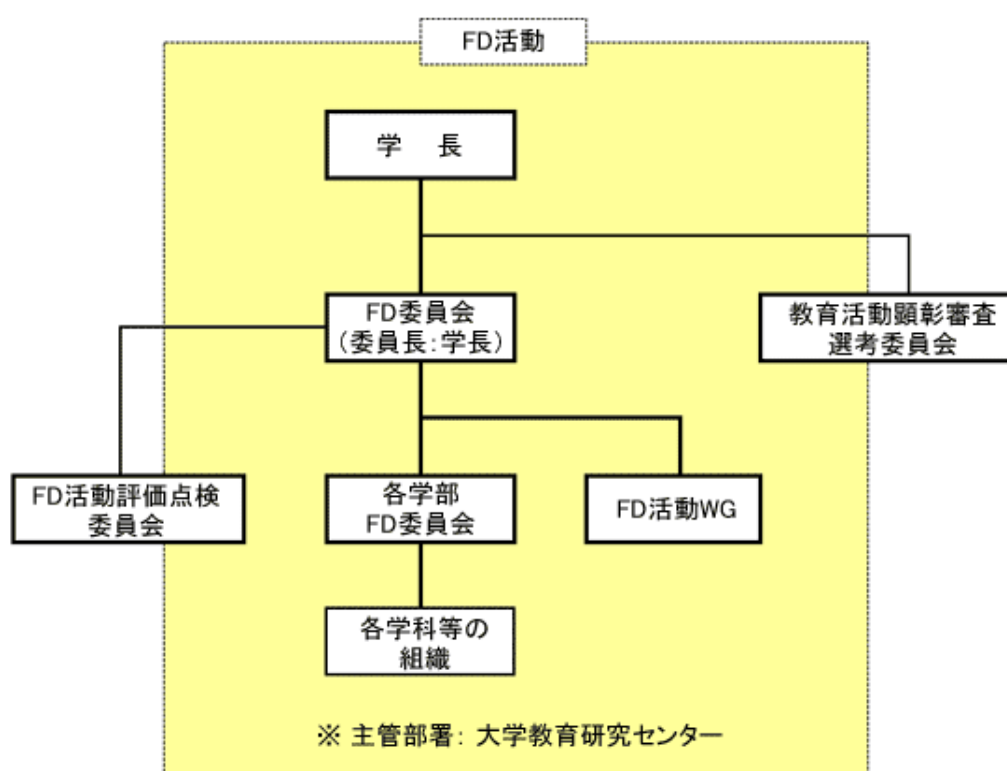


図 1 中部大学の FD 活動組織図

FD 委員会 : 本学の FD 活動全般について、学長を委員長として審議、検討をする。

FD 活動 WG : FD 委員会の専門委員会として、学部代表の FD 委員を中心に主に全学的な活動を企画する。

FD 活動評価点検委員会 : 本学の FD 活動全般について、第三者的な立場にたって評価点検をする。

教育活動顕彰審査選考委員会 : 教育活動顕彰制度に係る重要事項、および受賞者の審査、選考する。

2. 本学の FD 活動評価点検の対象

本学の FD 活動は、次の表に示すように 3 つの観点から分けられる。広義の FD 活動の目的となりうる「カリキュラム改善」や「組織の整備・改革」に関する諸活動は、FD 委員会の所掌事項でないため、これらを目的とした活動（網掛け部）は、本報告書の内容には含めていない。なお、授業担当者のみの授業改善の活動は、「教育活動重点目標・自己評価シート」と「学生による授業評価、教員による授業自己評価」によって実施され、後者は学内向けに HP 上で公開されている。

表 1 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動

【※1】 3 つの観点でみた中部大学の FD 活動（網掛け項目は除外する項目を表す）

目的別にみた FD 活動	対象別にみた FD 活動	形式別にみた FD 活動
1) 授業・教授法の改善	1) 全学対象	1) 会議
2) 教員の資質向上（研究交流を含む）	2) 学部対象	2) 研修会・懇談会
3) FD 活動の企画・運営など	3) 学科・教室対象	3) 講演・報告会
カリキュラム改善	(*1)非常勤を含む	4) ワークショップ・セミナー
組織の整備・改革	(*1)学生を含む	5) 制度・システムなど(*2)
	授業担当者	

(*1)：対象別 1)～3) で非常勤を含む場合、学生を含む場合

(*2)：授業評価システム、授業改善アンケートの制度の運用やシステムの構築、および出版などが該当

3. 2014 年度の FD 活動の重点目標

FD 活動の重点目標として 2008 年度より 5 年間を目安とした『魅力ある授業づくり』は、2013 年度以降も重点目標とすることが 2012 年度の FD 委員会で決定され、以下の考え方をもとに 2014 年度も継続して FD 活動を進めてきた。

『魅力ある授業づくり』は、学生と教員が協同して行うものです。

魅力ある授業・・・（学生にとって）興味を持って聴ける授業、将来において役立つ授業
 （教員にとって）学生の成長を実感できる授業、学生から感化を受ける授業
 授業づくり・・・（学生が目指す）自主的に学ぶ態度、知識・技術の修得
 （教員が目指す）授業改善、授業スキルアップ
 （学生と教員が目指す）双方向のコミュニケーション

本学では、評価点検の結果から改善を繰り返し、個人レベルから、学部学科を越えたグループ、学部学科、全学を対象に活発な FD 活動を進めてきた。こうした中、教育実践現場である各学部では、以下のような FD 活動の目標設定を行い、FD 活動に積極的に取り組んだ。

(1) 工学部・工学研究科

FD 講演会等に参加し、『魅力ある授業づくり』のノウハウを共有する。

(2) 経営情報学部・経営情報学研究科

- ①初年次教育の質の向上を目指す。
- ②全学 FD 活動の成果の経営情報学部への反映。
- ③『魅力ある授業づくり』の基礎をなす「学生による授業評価」への参加率を向上させる。
- ④授業改善報告会兼教育活動優秀賞報告会を実施する。

(3) 国際関係学部

『魅力ある授業づくり』のために、以下の項目に重点を置き、「実施方法の改善、留意点」などに関する情報共有を促進していく。

- ①英語や中国語を活用した「専門科目」講義の実施
- ②「フィールドワーク」を中心とする学外での教育活動の展開
- ③「国際関係学部 Web ポートフォリオ」の一層の活用

(4) 人文学部

2013 年度と同様の 3 項目を柱に据え、その中で、2012 年 8 月の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を」を育成するための方法も模索する。第 1 に、高校と大学との連携を強化し、スムーズに大学教育への移行を図ることである。第 2 に、フィールドスタディ等を通じて春日井市を中心とした地域社会との連携を強化することである。第 3 に、アクティブ・ラーニングによる学生の主体的な学習を引き出す双方向型の教授法の授業実現に向けて取り組むことである。

(5) 応用生物学部・応用生物学研究科

—FD 活動の見える化、共有化を目指す—

- ①『魅力ある授業づくり』に関して、「授業において気をつけていること」等について学部内での報告会、意見交換会を計画する。
- ②『魅力ある授業づくり』に関して、学生による授業評価、教員による授業評価、コメントへの回答の回収率向上を具体的目標として学部全体で継続し、取り組む。
- ③『魅力ある授業づくり』に関して、各教員の授業改善に関する重点目標、および授業評価コメント一覧の良かったところ、改善点等を参考とし、自己の授業改善に努める。
- ④各教員は全学 FD 講演会その他の全学レベルの FD 支援活動に積極的に参加することとし、参加教員の報告会を実施する。

(6) 生命健康科学部・生命健康科学研究科

- ①看護学セミナー、臨床検査教育セミナー、理学療法教育セミナー、作業療法教育セミナー、臨床工学教育セミナー、健康スポーツ教育セミナー等を企画し、学部・学科教育に外からの刺激を与える。
- ②春学期と秋学期の終わりに学部全体で授業反省会を行ない、授業の課題や問題点を全教員で共有するようにする。

- ③学期毎にクラス委員と教員の懇談会を開催し、学生からの意見・要望を把握し授業内容に反映させるようにする。
- ④各臨床実習指導者会議を年1回開催し、多くの教員と実習指導施設の構成員が参加する。実習指導施設の意見等を学部の教育に生かす。
- ⑤各学科で、early exposure を実施し、1年生に対する病院見学や企業見学を行なう（職業に対するモチベーションの向上）。
- ⑥模擬試験を頻回行うことによる国家試験対策を充実させる。

(7) 現代教育学部

昨年度の学部 FD 活動では、毎回異なる小テーマを設定して、グループ討論と実践報告形式で5回（隔月水曜日：約60分）行った。基本的には、今年度もこの形式で継続する予定であるが、毎回の小テーマに関しては、見直しを検討する予定である。小テーマのうちで1回、参加者に『魅力ある授業づくり』について討論する機会を設定する。

(8) 全学共通教育部

全学共通教育を中心とした新教育改革の理念の下、全学共通教育部の FD 活動の継続的推進を図る。また教育科を越えた FD 活動はどのようにあるべきかについても議論し、各教育科が担当する科目の教育内容・教育理念に関して、教員間の共通理解の形成（懇談会・研修会の実施、教材提供等による）を図る。

さらに『魅力ある授業づくり』等に向けての取り組み(授業・教授方法の改善、学生による授業評価、教員による授業自己評価の実施率を高める等)のための具体的方法についても検討する。特に、今年度は、第2クール(2015年度から)に向けた全学共通教育科目の『魅力ある授業づくり』のための改善(教育方法・授業内容・体制・施設・設備等の改善・充実と学外の研究会・ワークショップへの参加によるスキルアップ等)を図る。

(9) 国際人間学研究科

文化系が主体をなし多彩な学問領域をカバーする国際人間学研究科では、外部との接触による研究・教育能力の向上と、内部における相互接触による啓発・啓蒙の二つが考えられる。このため、外と内の二方向から FD 活動を推し進め、研究科全体のレベルアップを図る。

(10) 教育学研究科

- ①学部と連携した授業改善のための授業公開・授業研究の実施
- ②研究交流会の実施による教員組織の体制化
- ③教育モデル構築の取り組み
- ④院生への情報提供ネットワークの活性化

7年目となった『魅力ある授業づくり』は、授業評価回答率のアップや授業力向上などのこれまでの継続的な目標だけでなく、学部・学科での情報共有の場を設けたり、学部の特色が出

てくるような目的設定がなされたりするようになってきた。

4. 2014 年度の FD 活動の取り組み

4. 1 全学の取り組み

2014 年度の全学としての取り組みは、大学教育研究センターHP (<http://www.chubu.ac.jp/FD/>) に詳細が掲載されている。主な取り組みとして、①教員による教育活動重点目標の設定および自己評価、②授業改善の取り組み、③FD フォーラム・講演会、④FD に関する研修会・説明会等、⑤出版物、⑥教育活動顕彰制度、⑦中部大学『魅力ある授業づくり』プログラムを実施、2014 年度より、⑧全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPDF) 実践プログラム (オンデマンド講義) を全教職員に対して参加可能とした。その現状と評価を記述する。

①教員による教育活動重点目標の設定

教員個人の FD 活動を自己点検することを主な目的として全学の助教以上に提出を求めている教育活動重点目標・自己評価シートは、年度初めに、各教員が教育活動重点目標を設定し、年度末に自己評価を行っている。2014 年度の目標設定者は在籍教員の該当者 463 人中 445 人、自己評価提出者は目標設定者 445 人中 439 人であった。

②授業改善の取り組み

『魅力ある授業づくり』のための主な取り組みとして、以下の 6 つを取り組んできた。

1) Web による「学生による授業評価」「教員による授業自己評価」

「Web 入力方式」だけであった「学生による授業評価」に「携帯電話・スマートフォン入力方式」を導入して 6 年目となる。2014 年度、「授業評価」の学生の回答率は、春学期約 33%、秋学期約 25%、教員の自己評価回答率は、春学期約 61%、秋学期約 60% であった。学生の回答率は 2013 年度春学期の約 26% から大幅に増加し、30% を超えた。2013 年度秋学期が 19% であったが、再び 20% 台に回復した。毎年、秋学期の学生回答率は、春学期に比べて減少という傾向は同様であった。さらに、自由記述においては、春学期 3,257 件 (2013 年度より 5% 増)、秋学期 2,490 件 (2013 年度より 17% 増) と昨年より増加していた。また、『授業評価の結果に対する教員コメント』については、2013 年度より春学期はコメント率が減少したものの、秋学期は、コメント教員数が 3% 増加し該当教員数に対するコメント率は 56.8%、コメント科目数も約 2% 増加し該当科目数に対するコメント率も 61.9% と、秋学期としては、過去最高となった。

授業評価の回答率については、学科による違いが大きい点は例年同様である。学部・学科としての取り組み、認識の差があることは否めない。特に各教員の意識が大きな要因になっていることも事実であり、学生への働きかけを強める意識が望まれる。

2) 携帯電話を活用したクリッカーシステムの提供 (授業改善アンケートシステム)

携帯電話による「授業改善アンケート」を援用し、授業中、教員がネット環境を使える場所であれば、学生の反応を瞬時に把握できるクリッカーシステムである「Cumoc (キューモ: Chubu University Mobile Clicker)」を導入して 5 年目となる。研修を行うなど教員が利用しやすい環境とするために 2011 年 7 月に新たに「CumocL」を整備し、

2013年4月にはアンケートシステムとして学内に提供を開始した。

なお、「授業改善アンケート」は、春学期90件、秋学期105件で合計195件（昨年度198件）の利用であった。今後、更なる活用の増加が期待される。

3) 授業改善ビデオ撮影支援制度

授業担当者からの希望による授業ビデオ撮影支援制度の2014年度実績は21件（昨年度17件）で、授業サロンにおける授業担当者の振り返りのための撮影15件（昨年度10件）を含んでいる。制度の利用が進んでいることが示された。

4) 授業のオープン化制度

授業担当者に申し出ることで、他の教員が授業を参観できるシステムであり、後述の「全学公開授業」「授業サロン」もこの趣旨を基に実施している。

5) 全学公開授業

「全学公開授業」を6件（昨年度4件）実施し、延べ56人（昨年度33人）の教職員の参加があり、大幅に参加教員が増加している。

6) 授業サロン

「授業サロン」では、学部を越えた5人の教員による授業見学とピアコンサルティングを行っている。参加教員による授業見学とピアコンサルティングを行う「授業サロン」が春学期2グループ、秋学期1グループ（昨年度、各学期1グループ）実施され、授業の振り返り、また授業改善のヒントになる点などが意見交換された。今回で15グループとなり、延べ人数で75人の専任教員が参加したことになる。FDネットワークの構築に繋がり、本学のFDの特徴を表す取り組みとして定着している。

7) FD カフェ

「FD カフェ」は、教職員による自由な意見交換の場である。大学教育に関するさまざまなテーマ、学生と直面している必要な知識などの実践的なテーマに関して自由に意見を交わすことで情報やスキルを共有する場を提供することを目的として開催されている。2014年度は春学期2回（昨年度2回）、秋学期3回（昨年度2回）の計5回開催された。学生支援、双方向授業、教授法、アクティブ・ラーニングの話題を取り上げ、全国私立大学FD連携フォーラム（JPF）が提供しているオンデマンド講義の活用も含めて実施された。非常勤講師の参加も多く、普段、教職員が気軽に情報交換や意見交換を行う場が少ないため、グループの中で互いの教育力向上を目指しての議論や同じ悩みなど情報共有を行ったことが好評を得た。

③FDフォーラム・講演会

新課程の高校生、およびアクティブ・ラーニングに関する内容の2回のFD講演会、『魅力ある授業づくり』に関するFDフォーラム1回、が開催された。

「ゆとり教育」といわれた教育課程から、新たな教育課程で学んだ高校生を受け入れる大学への中高の教育課程の変遷データを基にした講演であり、教員が学生のレディネスを把握することの重要性を再認識する機会となった。アクティブ・ラーニングに関する講演会では、アクティブ・ラーニングの効果、またピア・サポーターとICTを活用したアクティブ・ラーニングの事例が授業評価や目標達成度の観点から紹介された。

フォーラムでは、FD の原点（教員相互の授業参観、授業法についての研究会、研修会など）に立ち返り、授業内容・方法を改善し向上させる組織的な取組をテーマに取り上げた。本学の 3 名の教員をパネリストに迎え、変わりゆく大学と学生たちを踏まえて、それぞれの経験談が紹介され、FD の原点から考える場となった。第 37 回 FD 講演会=80 人、第 38 回 FD 講演会=42 人、第 19 回 FD フォーラム=39 人。

④FD に関連する研修会・説明会等

毎年行われる年度初めの新任教員説明会では、学長、事務局長、大学教育研究センター長などから、本学の建学の精神、大学理念、本学の FD 活動等を説明している。

また、教員の授業スキルを含めたワークショップである教員キャリアアッププログラムを実施している。2014 年度は、FD に関する研究の第一人者の客員教授を講師として迎えて「授業デザイン」に関するプログラムを 2 回開催した。その他にも元アナウンサーの客員教授による「話し方」、学生相談室カウンセラーによる「学生への対応」および当センター教員による「Cumoc の活用」など授業スキルについての実践的研修が開催された。いずれも、本学の教員キャリアアッププログラムのプログラムメニューとしては充実してきており、形態もシステマティックになりつつある。繰り返し開催することで非常勤講師を含め、多くの教員が体験できるプログラムとなっている。

FD に関連する研修会等、教員キャリアアッププログラムに非常勤講師の参加が多いのも本学の特徴といえる。

⑤出版物

「教育・研究活動に関する実態資料」「中部大学教育研究」を発刊しており、前者は様々な基礎データを集約し、学内各種制度や対外的な申請や審査の基礎資料として活用されている。また後者は 1979 年より発刊されてきた「教育資料」を充実させ、新時代の大学教育の理念・手法・改善策などを論じ合う場を提供し、教育改善・質的向上に役立てることを目的に 2001 年から発刊しており、教員の情報共有の場ともなっており、特に研究論稿は教育研究の分野でも数多く引用されている実績を有している。さらに、大学の情報公開資料作成の一部に利用されている。

⑥教育活動顕彰制度

2008 年度より学部における評価項目の重みを増加し、また個人だけでなく団体、グループに対しても表彰できる特別賞を取り入れた「教育活動顕彰制度」を導入し、毎年前年度の教育活動について表彰しており、2013 年度の「教育活動優秀賞」は 16 人、「教育活動特別賞」は組織 1 グループが受賞する結果となった。実施要項、審査総評等は HP で公開されている。

⑦『魅力ある授業づくり』プログラム

すべての教員（特に教育歴の少ない教員や新たに本学に赴任する教員）が持続的に教育力の向上を目指すことを奨励し、FD プログラムへの積極的な参加を奨励するために、FD 委員会が主催している FD プログラムを活用して規定の要件を満たしたものに対して、本プログ

ラムの修了証を授与している。修了の要件については、リーフレットや HP 上で公開されており、3 年間の間に授業サロンまたは全学公開授業実施を必須としたポイント制をとっている。2014 年度は 16 人の教員が修了した。さらなる本学の特徴ある FD プログラムへの積極的な参加を促すきっかけになることが期待される。

⑧全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPF) 実践プログラム (オンデマンド)

本学が加盟している全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPF) が運営している実践的 FD プログラムは教員が自らの授業を専門分野と教育学の観点から省察できる知識、技能、態度、特にアクティブ・ラーニングを実践する能力を修得するプログラムである。2014 年度は個人で 14 人、4 組織が受講した。引き続き、啓発の機会として活用されることが期待される。

4. 2 学部・研究科での取り組み

各学部・各研究科において FD 活動評価点検報告書が作成されており、ここには提出された報告書から 2014 年度の学部・研究科・学科での FD 活動の特記すべき事項を①授業・教授法の改善に関する取り組み、②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み、の 2 つの目的別にまとめた。

①授業・教授法の改善に関する取り組み

- (1)学部・研究科での FD 講演会の開催 (工学部/工学研究科・人文学部・応用生物学部/応用生物学研究科・現代教育学部/教育学研究科)
- (2)学部・研究科での研修・セミナーの開催 (現代教育学部/教育学研究科)
- (3)教育関係のアンケート (全学共通教育部初年次教育科)
- (4)授業反省会 (生命健康科学部/生命健康科学研究科)
- (5)スタートアップセミナーの充実に向けた取り組み (経営情報学部/経営情報学研究科・全学共通教育部)

②研究交流を通じた教員の資質向上の取り組み

- (1)教員の情報発信力向上を目的とした講演会・シンポジウム (国際人間学研究科)
- (2)オンデマンド講義の視聴 (工学部/工学研究科・現代教育学部幼児教育学科)

各学部からの FD 活動に関する課題については、1) 講演会・セミナーに参加する教員の固定化、参加人数の鈍化があげられるが、これは今後も引き続きの課題である。それ以外には 2) 学生の入学から就職までの人材育成への取り組み、3) 各教員の FD への取り組みの見える化の必要性、4) 授業評価の回答率の向上、5) 教育活動顕彰制度のポイント等の客観化、などがあり、各学部・研究科固有の課題があげられた。

4. 3 2014 年度の FD 活動の取り組みの傾向

2014 年度の本学の FD 活動の目的別、対象別、内容形式別にまとめたのが次の 3 つの表である。2013 年度から会議・打ち合わせをこのデータからは外している。FD 活動の目的、対象は

バランスがとれているものと判断される。目的の傾向は年度で大きく変わらないが、「授業・授業法の改善」が増加傾向にあり、『魅力ある授業づくり』への取り組みがより進んでいると考える。対象をみると、全学よりもむしろ学部・学科等、個別の対応が進んでいた。内容形式については研修会・懇談会およびワークショップ・セミナーが増加している。表 2.3 より、学生参加の FD 活動の取り組みがやや増加していることも 2013 年度の特徴でもあり、これまでの学生参加型の FD 活動の課題に対して対応した結果ともいえる。

表2.1 目的別にみたFD活動（件数）

目的	2014年度	2013年度
授業・教授法の改善	66	62
教員資質向上のための研究交流	40	45
FD活動企画・運営	21	12
	127	119

表2.2 FD活動の対象別にみたFD活動（件数）

対象	2014年度	2013年度
全学対象	52	50
学部・研究科対象	30	19
学科・教室対象	30	25
	112	94
* 表2.2のうち、非常勤講師を含む	35	30
* 表2.2のうち、学生を含む	23	21

表2.3 形式別にみたFD活動（件数）

内容形式	2014年度	2013年度
研修会・懇談会	29	16
講演・報告会	59	56
ワークショップ・セミナー	27	18
制度・システムなど	12	14
	127	104

※ 上記の3表の合計件数は、重複項目があるため、一致しない。

5. FD 活動に関する課題と今後の計画

FD 活動全体としては年々充実してきており、『魅力ある授業づくり』の重点目標への意識も大学全体で高まってきている。一方で、課題としては参加教員の固定化、参加者数増加の鈍化など教員全体にまでは及んでいないことが引き続き上げられる。

大学教育およびそれに対する教員の意識については、ここ数年著しい変化が見られ、パラダイムシフトとも思えるような転換期を迎えている。「今までは」という考えが通用しない時代にもなりつつある。そのため、今後の課題としてまずは、新たに大学に赴任する教員への FD 活動の啓発をより重点的に取り組みたい。また教育の質保証として学生の成績評価を客観的な

のにするため、「ルーブリック評価」の活用を推奨し、必要に応じてプログラムの開催や環境の整備を行っていきたい。